

23 脊髄障害者の排便に関する調査報告

チーム便クリ 田中 匡、道木恭子 (自立支援局)
飛松好子、井上美紀、岩崎 洋 (病院)
中山 剛 (研究所)

【はじめに】脊髄障害者が社会復帰していく過程で、排便管理は生活の質に重大な影響を与える。脊髄障害に伴う排便障害は、障害の部位や程度によって様々であるが、多くは排便困難や便失禁を問題としている。問題の解決に向けた支援を検討するにあたって実態を把握するため、社会参加を目的としている自立支援局の利用者を対象に調査を実施したので報告する。

【目的】脊髄障害者を伴う自立支援局利用者の排便の実際と問題点を明らかにする。

【方法】半構成的面接調査法（排便方法、排便動作および日常の排便コントロールについてアンケート調査を行った）。対象は自立支援局を利用している脊髄障害者 28 名（男 27 名）、平均年齢 33.0 歳（18～51 歳）、受傷経過平均年数 4.68 年（11 ヶ月～19 年）。障害は頸髄損傷 17 名、胸髄損傷 4 名、腰髄損傷 2 名、その他 2 名、麻痺は完全 17 名、不全 10 名。

【結果】排便環境（複数回答）は、洋式便器 18 名、シャワーキャリー 1 名、高床洋式便器 6 名、高床長便器 5 名、ベッド上排便 1 名、その他 1 名。排便方法（複数回答）は、自然排便 6 名、温水洗浄便座 8 名、座薬 16 名、下剤 11 名、浣腸 4 名、摘便 18 名、その他 1 名であった。排便回数は、週 2 回 10 名、週 3 回 13 名、週 4 回 2 名、週 5 回 1 名、週 6 回 2 名、週 7 回 2 名、不定期 1 名。排便所要時間は 30 分未満 5 名、60 分 9 名、90 分 6 名、120 分 5 名、3～4 時間 2 名、その他 2 名。現在の排便に関する満足度は非常に満足 5 名、やや満足 7 名、どちらでもない 12 名、やや不満 3 名、非常に不満 1 名であった。不満の理由としては、いつ出るか分からない、薬を飲まないと出ない、失禁の可能性がある、時間が長い、確実な便意がない、排便日にいろいろ調整していることを考えるとストレス、将来の排便方法、つまった時が大変、排便量が少ないとき便秘にならないか不安、便意がおさまらない時がある、出きったか不安などが挙げられた。排便に伴う肛門トラブルがあった者は 17 名おり、痔核、痔出血が挙げられた。環境に関する不満として、洋式便器が少ない、使いづらい、手すりが短く怖い、洋式トイレでウォシュレットが 1 つしかない、トイレが汚い、おなかを壊したときにトイレが空いていない、トイレが足りない、洋式トイレで使い易いものが少ない、冬は寒い、トイレの数が足りないため排便回数を減らしたなどが挙げられた。

【まとめ】利用者の排便に関する不安としては、①排便コントロールについて、②社会復帰をする上で便失禁への対処、③肛門トラブルが挙げられた。そして不満としては、使用できるトイレの環境が少ないことが挙げられた。

今回のアンケートの結果より、問題解決のために専門スタッフによる排便相談窓口の設置、洋式トイレの数を増やす、適切な手すりの設置、室温調節のためのエアコンの設置といった排便環境の整備が必要と考えられる。今後、排便コントロール・肛門トラブルへの指導、社会復帰に向けた支援は取り組むべき課題である。